

特別優秀賞

親切をする側も、される側も

東京都 桜美林中学校 三年 山本彩佳

朝の電車に乗ると、私はまっさきに空いている座席を探す。ラッシュを避けて、授業開始の一時間前に到着するような早い電車に乗っているのに、席が空いていることはほとんどない。筋肉の病気で筋力が弱い私にとって、電車の中で立ち続けることはとても大変だ。腕の力も弱いので、高い位置にあるつり革を持つことはできない。

「今日は無理だったか。」あきらめて、ドアのそばに立ったそのときだった。

「こっち、空いています。」

びっくりして見上げると、若い男の人だった。どちらかという怖そうな人だったので、私は少しとまどった。

「こっち、空いているから、ついてきて。お母さんもいっしょに。」

私は、一人ではカバンを持って長距離を歩けないので、毎朝母がカバンを持って、学校までついてきてくれる。その男の人は、母にも声をかけた。母と私は顔を見合わせて、とまどいながら、その人のあとについていった。私がいた車両から少し離れたところまで歩いていくと、

「ここです。座って下さい。」と、もう一人の友人らしい男の人が言った。どうやら席を取っていてくれたようだ。

「お母さんも隣に座ってください。」

母はいつも座らない。私と同じように電車の中で立つのが辛い人に座って欲しいからだと、以前言っていた。

「あ、私は。」と母が言うと、

「僕たち、以前、お二人の前に座っていたんです。降りるときになるまで、娘さんの足が悪いと気づかなくて、今度お会いしたら、席をゆずろうと思っていたんです。今日乗ってくるのが見えたので、急いで声をかけました。会えてよかった。」

私は、なんだか申し訳なくて、小さな声で、

「ごめんなさい。ありがとうございます。」と言った。すると、「僕たちもうれしいです。ありがとうございます。」と言って、二人は別の車両に移動していった。

私は今まで誰かに席をゆずってもらったとき、申し訳ない気持ちで、複雑な心境だった。けれど、席をゆずることで、うれしいと感じる人がいることに驚いた。そして、する側と、される側が、それぞれ温かいうれしい気持ちになるようなことを、私も誰かにしてみたいと思うようになった。

学校生活で、私は友人に助けてもらうことが多い。移動教室のときに、車椅子を押してもらったり、荷物を持ってもらったりすることがある。私もただ助けてもらうだけではなく、誰かの役に立ちたいと思った。それからは、休んでいる友人のノートを取ってあげたり、友人の相談にのったり、自分のできることを探してするようになった。

「ありがとう」と言われると、とてもうれしい気持ちになった。相手のことを思い、行動することは、される側だけでなく、自分自身も幸せな気持ちになる。私にできることは小さなことだけれど、これからも誰かの助けとなることを探していきたいと思う。